英文解釈 L01 第 13 講 限定する関係節と補足する関係節を読む

学習目標

関係節が対象を選び分ける限定の情報なのか、既に定まっている対象に付け加える補足の情報なのかを区別し、その違いを保って英文全体を自然な日本語に訳せる。

構文図の凡例： S＝主語、V＝動詞、O＝目的語、C＝補語、M＝修飾語。main は主節の骨格と外側の役割、inner は関係節内部の役割を示す。〈〉は名詞機能、〔〕は形容詞機能（名詞を説明する関係節など）、( )は副詞機能を表す。V の下線は動詞の中心を示す。

対象を選び分ける情報と付け加える情報

関係節は、先行詞となる名詞を後ろから説明する。ただし、その説明には異なる 2 つの働きがある。**「どの人・物なのか」を選び分ける働き**と、**既に指している人・物について情報を付け加える働き**だ。

この違いを、関係代名詞 who を使った 2 つの英文で確かめよう。

対象を選び分ける情報（限定用法）

語注：brought＝bring（持ってくる）の過去形。near the window＝窓の近くに。

〈〈The students〉〔who brought notebooks〕〉 sat (near 〈the window〉).
S V M

S “The students who brought notebooks” / 主節 S / students を who 節が限定。ノートを持ってきた生徒たちが主語。
V “sat” / 主節 V / sat は過去形。「座った」。
M “near the window” / 場所 / 窓の近くに。

〈〈The students〉〔who brought notebooks〕〉 sat (near 〈the window〉).
S V O

S “who” / 関係節 S / who は students を受け、brought の主語になる。
V “brought” / 関係節 V / brought は過去形。「持ってきた」。
O “notebooks” / 関係節 O / 持ってきた対象はノート。

意味： ノートを持ってきた生徒たちは、窓の近くに座った。

読み方： 先行詞は students で、who brought notebooks（ノートを持ってきた）がその生徒たちを説明している。

ここでは、単に「生徒たち」と言うのではなく、「ノートを持ってきた」という情報によって、どの生徒たちを指すのかを限定している。このように、関係節が先行詞の指す対象を選び分ける働きをするものを**限定用法**という。

ただし、この英文は「ノートを持ってこなかった生徒が実際にいた」とまで述べているわけではない。関係節が対象を限定していることと、条件に当てはまらない人の実在とは区別する必要がある。

既に定まった対象に情報を付け加える（補足的用法）

語注：work at ～＝～で働く。visit＝～を訪ねる。

〈My friend Anna〉, 〔who works (at 〈the library〉)〕, visited me yesterday .
S　V　O　M

S “My friend Anna” / 主節 S / My friend Anna が主語。who 節はこの人物への補足であり、対象を選び分けない。
V “visited” / 主節 V / visited は過去形。「訪ねた」。
O “me” / 主節 O / me は訪問を受けた相手。
M “yesterday” / 時 / 昨日。

〈My friend Anna〉, 〔who works (at 〈the library〉)〕, visited me yesterday.
S　V　M

S “who” / 関係節 S / who は My friend Anna を受け、works の主語になる。
V “works” / 関係節 V / works は現在形。アンナが働いていることを表す。
M “at the library” / 勤務場所 / 図書館で働いている。

意味： 私の友人アンナは、図書館で働いていて、昨日私を訪ねてきた。

読み方： 先行詞は My friend Anna で、誰について述べているのかは「私の友人アンナ」という部分で既に定まっている。

その後の who works at the library（図書館で働いている）は、アンナをほかの人から選び分けるためではなく、アンナについて情報を付け加えている。

このように、既に定まっている先行詞に補足情報を加える関係節を**補足的用法（非制限用法）**という。ここでは関係節をコンマで区切り、主節の visited me yesterday（昨日私を訪ねてきた）と区別して読む。

補足的用法の関係節も、英文が伝えている情報の一部だ。したがって、全文和訳では「図書館で働いている」という内容を省いてはいけない。一方、「図書館で働いているから訪ねてきた」という因果関係を付け加えることもできない。

2 つの用法を読み分ける視点

限定用法では、先行詞と関係節を結び付けて「どの人・物か」を確定する。補足的用法では、先行詞が指す対象を押さえたうえで、関係節が加える情報を受け取る。

コンマの有無は重要な手がかりだが、読み取るべきなのは、関係節と先行詞の情報関係である。補足情報だからといって、話者にとって重要度が低いとは限らない。また、補足的用法から現実の人数や唯一性を決めつけることもできない。

和訳するときは、まず先行詞を確認し、次に関係節が対象を限定するのか、情報を補足するのかを判断する。そのうえで、**どちらの情報も落とさず、原文にない意味を足さずに訳す**ことが大切だ。

人を先行詞とする who の補足を読む

人を先行詞とする補足的用法の who を読むときは、**先行詞が誰を指すかを確認し、補足情報を受け取った後で、主節の内容を最後まで追う**ことが重要だ。

補足的な関係節は、主語と主節の動詞の間に入る場合もあれば、主節の後ろに続く場合もある。どちらも、関係節がどこまで続くのかを見極めることで、文の中心を見失わずに読める。

主語と動詞の間に補足情報が入る場合

語注：greet＝（人に）あいさつする。after class＝授業後に。

〈Ms. Kato〉, 〔who teaches music〕, greeted 〈the students〉 (after class).
S V O M

S “Ms. Kato” / 主節 S / Ms. Kato が主語。who 節は加藤先生への補足情報。
V “greeted” / 主節 V / greeted は過去形。「あいさつした」。
O “the students” / 主節 O / あいさつを受けた生徒たち。
M “after class” / 時 / 授業後に。

〈Ms. Kato〉, 〔who teaches music〕, greeted 〈the students〉 (after class).
S V O

S “who” / 関係節 S / who は Ms. Kato を受け、teaches の主語になる。
V “teaches” / 関係節 V / teaches は現在形。音楽を教えていることを表す。
O “music” / 関係節 O / 教えている対象は音楽。

意味： 加藤先生は音楽を教えていて、授業後に生徒たちにあいさつした。

読み方： 先行詞は Ms. Kato（加藤先生）である。who teaches music は、その加藤先生について「音楽を教えている」という情報を補っている。

ここで注意したいのは、who teaches music を読んだところで文全体が終わるわけではないことだ。2 つ目のコンマで補足の関係節が終わり、greeted the students after class という主節の述語部分へ戻る。

英文の中心は「加藤先生が生徒たちにあいさつした」という過去の出来事である。そこに「音楽を教えている」という現在形の情報が加わっている。補足を挟んでも、主節の動詞 greeted を見失わず、それぞれの時制を保って訳す。

主節の後ろに補足情報が続く場合

語注：neighbor＝近所の人。spoke with ～＝～と話した。grow vegetables＝野菜を育てる。

I spoke (with 〈my neighbor Yuki〉), 〔who grows vegetables (in 〈her garden〉)〕.
S V M

S “I” / 主節 S / 話し手の「私」。
V “spoke” / 主節 V / spoke は過去形。「話した」。
M “with my neighbor Yuki” / 話し相手 / with 句は話し相手のユキを示す。who 節はユキへの補足情報。

I spoke (with 〈my neighbor Yuki〉), 〔who grows vegetables (in 〈her garden〉)〕.
S V O M

S “who” / 関係節 S / who は my neighbor Yuki を受け、grows の主語になる。
V “grows” / 関係節 V / grows は現在形。ユキが野菜を育てている。
O “vegetables” / 関係節 O / 育てている対象は野菜。
M “in her garden” / 場所 / 庭で。her はユキ自身を指す読みを採用するが、別の女性を指す可能性もある。

意味： 私は近所に住むユキと話した。ユキは自分の庭で野菜を育てている。

読み方： 主節は I spoke with my neighbor Yuki で、「私は近所に住むユキと話した」という内容である。

続く who grows vegetables in her garden は、my neighbor Yuki という名詞のまとまりを先行詞とし、ユキについて「自分の庭で野菜を育てている」という情報を補っている。ここでは her をユキ自身を指すものとして訳している。ただし、her は文脈によって別の女性を指すこともあり、原

文だけでユキとの同一参照を必然とは判断できない。野菜を育てている主体は、who が指すユキである。

この英文では、先に主節の意味を確定できる。その後、コンマに続く who 以下を、ユキについての補足情報として受け取ればよい。関係節は文末まで続き、主節の後ろへ別の主節が加わっているわけではない。

補足情報を保って日本語にする

補足的用法の who を含む英文は、日本語で必ず一文に収める必要はない。先行詞との関係が明確なら、2 つ目の英文のように「私はユキと話した。ユキは……」と文を分けてもよい。

ただし、文を分けるときも、補足情報が誰について述べているのかを保つ必要がある。今回の英文では、庭で野菜を育てているのはユキであり、話し手の I ではない。

また、補足された内容と主節の出来事に、英文が述べていない理由や因果関係を付け加えてはいけない。

読み進める際は、**先行詞を確認する → who 以下の補足範囲を捉える → 主節の内容を確定する → 両方の情報を和訳に残す**という流れを意識するとよい。

物を先行詞とする which の補足を読む

人について補足する場合は who を使ったが、物について補足する場合には**関係代名詞 which** を使う。

コンマ付きの which を読んだら、まず「どの名詞について情報を付け加えているのか」を確認する。その後、関係節の終わりを見極め、主節の内容と補足情報の両方を読み取る。

主語の途中に物の補足情報が入る場合

語注：have a flat tire＝タイヤがパンクしている。garage＝車庫。

〈My bicycle〉, 〔which has 〈a flat tire〉〕, is (in 〈the garage〉).
S　V　M

S “My bicycle” / 主節 S / My bicycle が主語。which 節は自転車への補足情報。
V “is” / 主節 V / is は現在形。自転車の現在の所在を述べる。
M “in the garage” / 場所 / 車庫の中に。

〈My bicycle〉, 〔which has 〈a flat tire〉〕, is (in 〈the garage〉).
S　V　O

S “which” / 関係節 S / which は My bicycle を受け、has の主語になる。
V “has” / 関係節 V / has は現在形。has a flat tire でタイヤがパンクしている状態を表す。
O “a flat tire” / 関係節 O / a flat tire は has の目的語。

意味： 私の自転車はタイヤがパンクしていて、車庫にある。

読み方： 先行詞は My bicycle（私の自転車）であり、which has a flat tire は、その自転車について「タイヤがパンクしている」という情報を補っている。

この英文では、主語 My bicycle と主節の動詞 is の間に、補足的な関係節が挟まれている。

関係節をいったん区切ると、主節の中心は My bicycle is in the garage（私の自転車は車庫にある）となる。そこへ、which has a flat tire という補足情報を結び付ければ、文全体の意味がつかめる。

また、関係節の has と主節の is は、どちらも現在形である。補足部分を日本語に組み込む際も、「タイヤがパンクしている」という状態を勝手に過去の出来事へ変えないようにする。

目的語の後ろに補足情報が続く場合

語注：wooden＝木製の。contained＝contain（中に〜が入っている）の過去形。silver＝銀色の。

I　opened 〈the wooden box〉, 〔which contained 〈a small silver key〉〕.
S　V　O

S “I” / 主節 S / 箱を開けた主体は「私」。
V “opened” / 主節 V / opened は過去形。「開けた」。
O “the wooden box” / 主節 O / the wooden box が目的語。which 節はこの箱への補足情報。

I opened 〈the wooden box〉, 〔which contained 〈a small silver key〉〕.
S　V　O

S “which” / 関係節 S / which は the wooden box を受け、contained の主語になる。
V “contained” / 関係節 V / contained は過去形。箱の中に入っていたことを表す。
O “a small silver key” / 関係節 O / 箱に入っていたのは小さな銀色の鍵。

意味： 私は木製の箱を開けた。その箱には小さな銀色の鍵が入っていた。

読み方： 主節は I opened the wooden box であり、「私は木製の箱を開けた」という過去の出来事を表している。

続く which contained a small silver key は、the wooden box を先行詞とする補足的な関係節である。

ここで which が受けているのは、直前の **box という名詞**を中心とする the wooden box であり、「箱を開けた」という出来事を説明しているのではない。

関係節の contained a small silver key は、箱の中に小さな銀色の鍵が入っていたことを伝える。主節の opened と関係節の contained は、どちらも過去形である。

このように、補足情報が目的語の後ろに続く場合は、先に主節の意味を捉え、その後で先行詞についての情報を付け加えると読みやすい。

補足する which を全文和訳につなげる

物を先行詞とする補足的用法では、which が何を指すかを確定することが、正確な和訳につながる。

先行詞が主語であっても目的語であっても、関係節の情報はその名詞に結び付ける。コンマで区切られているからといって、別の物について述べているわけではない。

日本語では、補足情報を主節と一文にまとめても、二文に分けてもよい。大切なのは、**何についての補足なのかを明確にし、主節と関係節の両方の意味を残すこと**だ。

例えば、2 つ目の英文を訳す際に「箱を開けたので、中に銀色の鍵が入っていた」とすると、原文にない因果関係を加えてしまう。箱を開けたことと、箱に鍵が入っていたことは、それぞれ原文どおりに表す必要がある。

英文中の which を見つけたら、まず先行詞となる名詞を確かめる。そして、関係節が伝える情報をその名詞へ結び付け、主節の主体・時制・意味を変えずに全文を訳す。

©ミライコーチング

情報関係を保って全文を訳す

関係節を正しく見分けても、その情報関係が和訳で変わってしまっては、英文を正確に読めたことにはならない。

限定用法では、関係節の情報を先行詞に結び付け、「どの人・物か」が伝わる名詞のまとまりとして訳す。補足的用法では、既に定まっている対象についての情報を、主節の内容とともに訳す。

重要なのは、**日本語の文を区切ることと、英文にない意味を付け加えることは違う**という点だ。

限定用法：対象を選び分ける情報を残す

語注：reserve seats＝座席を予約する。online＝オンラインで。side door＝脇の入口。show＝公演。

〈〈The guests〉〔who reserved seats online〕〉 entered 〈the theater〉
S V O

(through 〈the side door〉) (before 〈the show〉).
M M

S “The guests who reserved seats online” / 主節 S / 先行詞は guests。who 節が「オンラインで座席を予約した」来場者たちに対象を限定する。非該当者の実在は示さない。
V “entered” / 主節 V / entered は過去形。「入った」。
O “the theater” / 主節 O / 入った先は劇場。
M “through the side door” / 経路 / 劇場の脇の入口から。
M “before the show” / 時 / 公演の前に。

〈〈The guests〉〔who reserved seats online〕〉 entered 〈the theater〉 (through 〈the side door〉) (before 〈the show〉).
S V O M

S “who” / 関係節 S / who は guests を受け、reserved の主語になる。
V “reserved” / 関係節 V / reserved は過去形。「予約した」。
O “seats” / 関係節 O / 予約した対象は座席。
M “online” / 方法 / オンラインで予約した。

意味： オンラインで座席を予約した来場者たちは、公演の前に劇場の脇の入口から入った。

読み方： 先行詞は the guests で、who reserved seats online は「オンラインで座席を予約した」という条件によって、どの来場者たちを指しているかを限定している。

主節では、その来場者たちが entered the theater（劇場に入った）という過去の出来事を述べている。through the side door は入場した経路、before the show はその時を表す。

ここで「来場者たちは劇場の脇の入口から入った」とだけ訳すと、who 以下の限定情報が失われる。原文が示す対象の範囲を保つには、「オンラインで座席を予約した来場者たち」というまとまりで訳す必要がある。

一方、「オンラインで予約しなかった来場者たちは正面入口から入った」といった情報は、この英文からは分からない。また、オンライン予約が脇の入口を使った理由だとも述べられていない。

限定された対象について何が述べられているのかを読み取り、**条件に当てはまらない人の存在や行動まで推測して付け加えない**ことが大切だ。

解説

補足的用法：情報を区切っても意味を変えない

語注：display＝展示する。region＝地域。may＝〜かもしれない。close for repairs＝修繕のために休館する。

〈The city museum〉(S), 〔which displays 〈maps 〔of 〈the region〉〕〉〕, may close (V) (for repairs) (M) (next month) (M).

S “The city museum” / 主節 S / The city museum が主語。which 節はこの博物館への補足情報であり、対象を選び分けない。
V “may close” / 主節 V / may close は休館する可能性を表す。休館の決定や実現は断定しない。
M “for repairs” / 目的 / 修繕のために。
M “next month” / 時 / 来月。休館する可能性がある時を示す。

〈The city museum〉, 〔which (S) displays (V) 〈maps 〔of 〈the region〉〕〉〕, may close (for repairs) (next month).

S “which” / 関係節 S / which は The city museum を受け、displays の主語になる。
V “displays” / 関係節 V / displays は現在形。「展示している」。
O “maps of the region” / 関係節 O / 展示対象は地域の地図。of the region は maps を説明する。

意味： その街の博物館は地域の地図を展示しており、来月、修繕のために休館するかもしれない。

読み方： 先行詞は The city museum で、which displays maps of the region は、その博物館について「地域の地図を展示している」という情報を補っている。

主節の中心は The city museum may close である。may は可能性を表しているため、休館が決定していると断定してはいけない。for repairs は修繕という目的・理由を、next month は休館するかもしれない時を表している。

この英文は、次のように日本語を二文に分けても意味を保てる。

「その街の博物館は、来月、修繕のために休館するかもしれない。その博物館では、地域の地図を展示している。」

一文にまとめた訳と二文に分けた訳では、日本語の形は異なる。しかし、博物館が地図を展示していること、来月修繕のために休館する可能性があることは、どちらも保持されている。

注意したいのは、which 以下の補足情報と主節を、勝手に理由や対比の関係で結び付けないことだ。「地域の地図を展示しているので休館する」とすれば、原文が述べていない因果関係を作ってしまう。

また、この英文から、その街に博物館が一つしか存在しないと判断することもできない。補足的用法であることは、現実の施設数を示す根拠にはならない。

自然な和訳と意味の正確さを両立させる

英語の関係節を日本語に移すとき、英文と同じ語順や文の区切りを保つ必要はない。ただし、情報の結び付きは変えてはいけない。

限定用法なら、関係節がどの対象を指すための情報なのかを明確にする。補足的用法なら、先行詞との対応を保ちながら、主節とは区別される追加情報として訳す。

そのうえで、主節と関係節のそれぞれについて、誰が何をしたのか、時制や助動詞が何を表しているのかを確かめる。

訳し方を自然に整えることはできても、原文が伝える情報を削ったり、原文が述べていない事実や因果関係を足したりすることはできない。 この区別を意識することで、英文の情報関係を保った全文和訳につながる。

1

語注：volunteer＝ボランティア、手伝いをする人。extra＝追加の。hall＝ホール、集会場。

The volunteers who arrived before noon carried extra chairs into the school hall for the afternoon concert.

a. who で始まる関係節の先行詞を示し、その関係節が限定用法と補足的用法のどちらに当たるか、先行詞との情報関係から説明せよ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

例題 1 の解説

a. 先行詞と情報関係

先行詞は the volunteers（ボランティアたち）であり、関係節は who arrived before noon である。これは**限定用法**に当たる。

who arrived before noon は「正午前に到着した」という意味で、どのボランティアたちを指すのかを限定している。

関係節の内部では、who が arrived の主語に当たり、先行詞 the volunteers と対応している。関係節は before noon まで続き、その後の carried から主節の述語部分に戻る。

主節の中心は、the volunteers が extra chairs（追加のいす）を carried（運んだ）という過去の出来事である。

ここでは、関係節が先行詞についての追加説明を述べるのではなく、「正午前に到着した」という情報によって主節の動作主体を限定している。

ただし、この限定から、正午以降に到着したボランティアが実際にいたとまでは判断できない。英文が述べているのは、正午前に到着したボランティアたちの行動である。

〈〈The volunteers〉〔who arrived (before noon)〕〉 carried 〈extra chairs〉
S V O

(into 〈the school hall〉) (for 〈the afternoon concert〉).
M M

S “The volunteers who arrived before noon” / 主節 S / 先行詞は volunteers。who 節が正午前に到着したボランティアたちに対象を限定する。非該当者の実在は示さない。
V “carried” / 主節 V / carried は過去形。「運んだ」。
O “extra chairs” / 主節 O / 運んだ対象は追加のいす。
M “into the school hall” / 移動先 / 学校のホールの中へ。
M “for the afternoon concert” / 目的 / 午後の演奏会のために。

〈〈The volunteers〉〔who (S) arrived (V) (before noon)(M)〕〉carried 〈extra chairs〉(into 〈the school hall〉) (for 〈the afternoon concert〉).

S “who” / 関係節 S / who は volunteers を受け、arrived の主語になる。
V “arrived” / 関係節 V / arrived は過去形。「到着した」。
M “before noon” / 到着時 / 正午より前に。主節の carried の時ではない。

b. 全文和訳

直訳　正午より前に到着したボランティアたちは、午後の演奏会のために、学校のホールの中へ追加のいすを運んだ。

満点の訳　正午前に到着したボランティアたちは、午後の演奏会に備えて、学校のホールへ追加のいすを運び入れた。

どちらの訳でも、who arrived before noon を the volunteers に結び付け、「正午前に到着したボランティアたち」というまとまりで表している。

主節の carried は過去形なので、「運んだ」「運び入れた」と訳す。into the school hall は運び入れた先を、for the afternoon concert はその目的を表している。

ここで「ボランティアたちは正午前に到着し、いすを運んだ」と訳すと、原文の限定関係が、単に 2 つの行動を並べた表現へ変わってしまう。限定用法では、関係節の内容を先行詞に結び付けたまま訳すことが重要だ。

一方、「午後の演奏会に備えて」と「午後の演奏会のために」は、この英文では自然な言い換えとして使える。日本語の語順や表現は一つに固定されないが、限定される対象、運んだ物、運び入れた先、目的、過去の出来事であることは保つ必要がある。

2

語注：repaired＝repair（修理する）の過去形。belonged to ～＝～の所有物だった。

I repaired the old radio, which belonged to my grandfather, yesterday.

a. which で始まる関係節の先行詞を示し、その関係節が限定用法と補足的用法のどちらに当たるか、先行詞との情報関係から説明せよ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

例題 2 の解説

a. 先行詞と情報関係

先行詞は the old radio（その古いラジオ）であり、関係節は which belonged to my grandfather である。これは**補足的用法**に当たる。

which belonged to my grandfather は「私の祖父のものだった」という意味で、the old radioについて情報を付け加えている。

この英文では、the old radio が主節の repaired の目的語になっている。関係節の内部では、which が belonged to my grandfather の主語に当たり、先行詞 the old radio を指している。

which 以下は 2 つのコンマで区切られており、my grandfather までが補足的な関係節である。その後の yesterday は主節の repaired に結び付き、「昨日修理した」という時間関係を表している。

主節の中心は I repaired the old radio（私はその古いラジオを修理した）である。これに対し、which 以下は、修理したラジオについて所有関係を補っている。

ここでの which 以下は、「祖父のものだったラジオ」をほかのラジオから選び分ける限定情報としてではなく、既に取り上げたラジオへの補足情報として読む。

また、この英文から、話し手がほかにもラジオを持っていたかどうかは分からない。祖父のものだったことが修理の理由だとも述べられていない。

I　repaired 〈the old radio〉, 〔which belonged (to 〈my grandfather〉)〕, yesterday .
S　V　O　M

S “I” / 主節 S / 修理した主体は「私」。
V “repaired” / 主節 V / repaired は過去形。「修理した」。
O “the old radio” / 主節 O / 先行詞は the old radio。which 節はこのラジオへの補足情報であり、対象を選び分けない。
M “yesterday” / 修理した時 / yesterday は主節の repaired にかかる。「昨日修理した」。

I repaired 〈the old radio〉, 〔which belonged (to 〈my grandfather〉)〕, yesterday.
S　V　M

S “which” / 関係節 S / which は the old radio を受け、belonged の主語になる。
V “belonged” / 関係節 V / belonged は過去形。belong to で所有関係を表す。現在の所有者までは分からない。
M “to my grandfather” / 所有関係の相手 / to my grandfather は belonged に必要な前置詞句。祖父の所有物だったことを示す。

b. 全文和訳

直訳　私は昨日、その古いラジオを修理した。そのラジオは私の祖父のものだった。

満点の訳　私は昨日、古いラジオを修理した。そのラジオは祖父の持ち物だった。

どちらの訳でも、主節の「ラジオを修理した」という出来事と、関係節の「そのラジオは祖父のものだった」という補足情報を保持している。

主節の repaired と関係節の belonged は、ともに過去形である。したがって、修理したことも、祖父の所有物だったことも、過去の内容として訳す。ただし、belonged が過去形だからといって、現在は誰の所有物なのかまで判断することはできない。

また、yesterday は関係節が終わった後に置かれ、主節の修理した時を表している。「祖父のものだったのは昨日だけ」という意味にはならない。

補足的な関係節を日本語へ訳す際は、必ずしも一文にまとめる必要はない。今回のように二文へ分ければ、主節の出来事と補足情報をそれぞれ明確に伝えられる。

一方、「祖父のものだったので、私は昨日そのラジオを修理した」と訳すと、原文にない理由を付け加えてしまう。

日本語の語順や文の区切り方には自然な言い換えの余地があるが、**補足情報がどの名詞について述べているのかを明確にし、主節との間に原文が示していない関係を作らない**ことが重要だ。

1

語注：sign up for ～＝～に申し込む。workshop＝体験講座。collect＝受け取る。materials＝教材・資料（ここでは体験講座で使う資料）。front desk＝受付。

The students who signed up for the workshop collected their materials at the front desk this morning.

a. who で始まる関係節の先行詞を示し、その関係節が限定用法と補足的用法のどちらに当たるか、先行詞との情報関係から説明せよ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

2

語注：hiking trail＝ハイキングコース。be kept＝保管されている。drawer＝引き出し。

The maps which show the hiking trails are kept in a drawer near the entrance.

a. which で始まる関係節の先行詞を示し、その関係節が限定用法と補足的用法のどちらに当たるか、先行詞との情報関係から説明せよ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

3

語注：guide＝案内人。greet＝～にあいさつする。station＝駅。

Our guide, who speaks Spanish, greeted us at the station.

a. who で始まる関係節の先行詞を示し、その関係節が限定用法と補足的用法のどちらに当たるか、先行詞との情報関係から説明せよ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

4

語注：science fair＝科学展。study＝～を研究する。dry region＝乾燥地域。Dr.＝博士号を持つ人や医師などに用いる敬称（研究者の文脈では「博士」「先生」など。医師とは限らない）。

At the science fair, I met Dr. Ito, who studies plants in dry regions.

a. who で始まる関係節の先行詞を示し、その関係節が限定用法と補足的用法のどちらに当たるか、先行詞との情報関係から説明せよ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

©ミライコーチング

5

語注：community center＝地域の集会施設。kitchen＝調理室、台所。weekday＝平日。

The community center, which has a large kitchen, is open until nine on weekdays.

a. which で始まる関係節の先行詞を示し、その関係節が限定用法と補足的用法のどちらに当たるか、先行詞との情報関係から説明せよ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

6

語注：gallery＝美術館、画廊。admire＝〜を感心して眺める、すばらしいと思って鑑賞する。painting＝絵画。harbor＝港。at sunrise＝日の出の時に。

At the gallery, the students admired a painting, which shows a quiet harbor at sunrise.

a. which で始まる関係節の先行詞を示し、その関係節が限定用法と補足的用法のどちらに当たるか、先行詞との情報関係から説明せよ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

©ミライコーチング

演習問題の解答・解説

1

a. 先行詞と情報関係

先行詞は the students（生徒たち）であり、関係節は who signed up for the workshop である。これは**限定用法**に当たる。

who signed up for the workshop は「体験講座に申し込んだ」という意味で、どの生徒たちを指しているのかを限定している。

関係節の内部では、who が signed up for the workshop の主語に当たり、先行詞 the students と対応している。関係節は workshop まで続き、その後の collected から主節の述語部分へ戻る。

主節では、限定された生徒たちが their materials（彼らの資料）を collected（受け取った）という過去の出来事を述べている。

ここで関係節が表しているのは、主節の動作主体を選び分ける情報である。単に「生徒たちが資料を受け取った」と読むのではなく、「体験講座に申し込んだ生徒たち」が受け取ったと捉える必要がある。

ただし、この限定から、体験講座に申し込まなかった生徒が実際にいたとまでは判断できない。

〈〈The students〉〔who signed up (for 〈the workshop〉)〕〉 collected
S V

〈their materials〉 (at 〈the front desk〉) (this morning).
O M M

S “The students who signed up for the workshop” / 主節 S / 先行詞は students。who 節が体験講座に申し込んだ生徒たちへ対象を限定する。非該当者の実在は示さない。
V “collected” / 主節 V / collected は過去形。ここでは資料を受け取ったことを表す。
O “their materials” / 主節 O / 受け取った対象は資料。their は生徒たち自身を指す読みを採用するが、別の人々を指す可能性もある。
M “at the front desk” / 場所 / 受付で。
M “this morning” / 時 / 今朝。

〈〈The students〉〔who signed up (for 〈the workshop〉)〕〉 collected 〈their materials〉 (at 〈the front desk〉) (this morning).
S V 申込先

S “who” / 関係節 S / who は students を受け、signed up の主語になる。
V “signed up” / 関係節 V / signed up は過去形。「申し込んだ」。
phrase “for the workshop” / 申込先 / for the workshop は申し込んだ対象を示し、signed up と結び付く。

b. 全文和訳

直訳　体験講座に申し込んだ生徒たちは、今朝、受付で彼らの資料を受け取った。

満点の訳　体験講座に申し込んだ生徒たちは、今朝、受付で自分たちの資料を受け取った。

どちらの訳でも、who signed up for the workshop を the students に結び付け、体験講座に申し込んだ生徒たちを主節の動作主体としている。

主節の collected は過去形であり、資料を受け取ったという出来事を表す。at the front desk は資料を受け取った場所、this morning はその時を示している。

their は、この英文では体験講座に申し込んだ生徒たち自身を指すものとして読み、「自分たちの資料」と訳している。ただし、their が別の人々を指す文脈も考えられるため、英文だけでその可能性を完全に排除することはできない。

また、「体験講座に申し込んだので資料を受け取った」と訳すと、申し込みと資料の受け取りの間に、原文が明示していない理由の関係を加えてしまう。

「今朝」と「受付で」の語順などは自然に調整できるが、**関係節によって限定される対象と、主節で述べられる出来事を正確に対応させる**ことが重要だ。

2

a. 先行詞と情報関係

先行詞は The maps（地図）であり、関係節は which show the hiking trails である。これは**限定用法**に当たる。

which show the hiking trails は「ハイキングコースを示している」という意味で、どの地図について述べているのかを限定している。

関係節の内部では、which が show の主語に当たり、先行詞 The maps と対応している。show の目的語は the hiking trails（ハイキングコース）である。

関係節は trails まで続き、その後の are kept から主節の述語部分に戻る。

主節の中心は The maps are kept であり、地図が保管されていることを表している。主節の主語は、関係節によって限定された「ハイキングコースを示している地図」である。

この関係節は、既に定まっている地図へ情報を補足しているのではなく、主節の対象となる地図を選び分けている。

ただし、この英文から、ハイキングコースを示していない別の地図が実際に存在するとまでは判断できない。

〈〈The maps〉〔which show 〈the hiking trails〉〕〉 are kept
S V

(in 〈a drawer 〔near 〈the entrance〉〕〉).
M

S “The maps which show the hiking trails” / 主節 S / 先行詞は maps。which 節がハイキングコースを示す地図へ対象を限定する。別の地図の実在は示さない。
V “are kept” / 主節 V / are kept は現在形の受動態。「保管されている」。
M “in a drawer near the entrance” / 保管場所 / 引き出しの中。near the entrance は引き出しを説明する読みを採用するが、保管場所全体への補足とも読める。

〈〈The maps〉〔which show 〈the hiking trails〉〕〉 are kept (in 〈a drawer 〔near
S V O

〈the entrance〉〕〉).

S “which” / 関係節 S / which は maps を受け、show の主語になる。
V “show” / 関係節 V / show は現在形。「示している」。
O “the hiking trails” / 関係節 O / 示している対象はハイキングコース。

b. 全文和訳

直訳　ハイキングコースを示している地図は、入口の近くにある引き出しの中に保管されている。

満点の訳　ハイキングコースが載っている地図は、入口近くの引き出しに保管されている。

どちらの訳でも、which show the hiking trails を The maps に結び付け、保管されている地図がどのようなものなのかを明確にしている。

主節の are kept は現在形の受動態であり、地図が保管されている状態を表す。「誰かが地図を保管している」と能動的に訳すことも文脈によっては可能だが、その場合も原文にない具体的な管理者を作ってはいけない。

in a drawer は保管場所を示している。ここでは near the entrance をその引き出しの位置の説明として読み、2 つの訳もこの解釈を採用している。ただし、near the entrance を are kept 側に結び付け、保管場所についてさらに補足する読みも文脈によっては可能である。原文だけから、引き出しを直接修飾する解析だけを必須とは断定できない。いずれの解析でも、in a drawer が表す「引き出しの中」という情報を訳から省いてはいけない。

また、「ハイキングコースを示しているため、地図が引き出しに保管されている」と訳すと、原文にない理由を付け加えてしまう。

「ハイキングコースを示している地図」と「ハイキングコースが載っている地図」は、今回の文脈では自然な言い換えとして使える。日本語の表現は一つに固定されないが、**関係節が限定する地図の範囲、保管されているという状態、保管場所の関係**は変えずに訳す必要がある。

3

a. 先行詞と情報関係

先行詞は Our guide（私たちの案内人）であり、関係節は who speaks Spanish である。これは**補足的用法**に当たる。

who speaks Spanish は「スペイン語を話す」という意味で、Our guide について情報を付け加えている。

関係節の内部では、who が speaks の主語に当たり、先行詞 Our guide と対応している。関係節は Spanish まで続き、2 つ目のコンマの後にある greeted から主節の述語部分へ戻る。

主節の中心は Our guide greeted us（私たちの案内人が私たちにあいさつした）である。at the station は、あいさつした場所を表している。

この英文では、Our guide によって指している案内人を取り上げ、その人物について「スペイン語を話す」という情報を補っている。who 以下は、どの案内人かを選び分ける限定情報ではない。

ただし、補足的用法だからといって、案内人が現実に一人しかいなかったと判断することはできない。また、スペイン語を話すことが、あいさつした理由だとも述べられていない。

〈Our guide〉, 〔who speaks Spanish〕, greeted us (at 〈the station〉).
S V O M

S “Our guide” / 主節 S / Our guide が主語。who 節はこの案内人への補足情報であり、対象を選び分けない。
V “greeted” / 主節 V / greeted は過去形。「あいさつした」。
O “us” / 主節 O / us はあいさつを受けた「私たち」。
M “at the station” / 場所 / 駅で。

〈Our guide〉, 〔who speaks Spanish〕, greeted us (at 〈the station〉).
S V O

S “who” / 関係節 S / who は Our guide を受け、speaks の主語になる。
V “speaks” / 関係節 V / speaks は現在形。案内人がスペイン語を話すことを表す。
O “Spanish” / 関係節 O / 話す言語はスペイン語。

b. 全文和訳

直訳　私たちの案内人はスペイン語を話す人であり、駅で私たちにあいさつした。

満点の訳　私たちの案内人はスペイン語を話す人で、駅で私たちにあいさつした。

どちらの訳でも、主節の「あいさつした」という出来事と、関係節の「スペイン語を話す」という補足情報を保持している。

主節の greeted は過去形であり、駅であいさつしたという過去の出来事を表す。一方、関係節の speaks は現在形であり、案内人がスペイン語を話すという現在の性質・能力を表している。

したがって、who speaks Spanish を「スペイン語を話した」と過去の一回の行動として訳すと、関係節が伝える意味が変わってしまう。

また、us は「私たち」を指し、あいさつを受けた相手を表している。話し手が案内人にあいさつしたと読み違えてはいけない。

日本語では「スペイン語を話す案内人」と一まとまりにする訳し方も文脈によって可能だが、今回の英文では、who 以下を既に取り上げた案内人への補足情報として読む。

一文にまとめても二文に分けてもよいが、**案内人がスペイン語を話すことと、駅で私たちにあいさつしたことを、それぞれ原文どおりに伝える**必要がある。

4

a. 先行詞と情報関係

先行詞は Dr. Ito（伊藤先生）であり、関係節は who studies plants in dry regions である。これは**補足的用法**に当たる。

who studies plants in dry regions は、ここでは「乾燥地域の植物を研究している」という意味に読み、Dr. Ito について情報を付け加えている。

関係節の内部では、who が studies の主語に当たり、先行詞 Dr. Ito と対応している。studies の目的語は plants であり、ここでは in dry regions を plants に結び付けて読む。

主節は At the science fair, I met Dr. Ito であり、「科学展で私は伊藤先生に会った」という過去の出来事を表している。

この英文では、先に主節で Dr. Ito を取り上げ、その後にコンマ付きの who 以下で研究内容を補っている。関係節は文末まで続くため、途中で新たな主節に戻る部分はない。

ここで重要なのは、who 以下が伊藤先生についての補足情報であり、「乾燥地域の植物を研究している人の中から伊藤先生を選び分ける」という限定情報ではないことだ。

なお、in dry regions は「乾燥地域で植物を研究している」と、研究が行われる場所を表す読み方も文法的に可能である。今回は植物を説明する読み方を採用するが、文脈がなければ研究場所を表す解釈も排除できない。

また、Dr.という敬称だけから、伊藤先生が医師であると断定してはいけない。

(At 〈the science fair〉), I met 〈Dr. Ito〉, 〔who studies 〈plants 〔in 〈dry regions〉〕〉〕.
M　　S　V　O

M “At the science fair” / 場所 / 科学展で。
S “I” / 主節 S / 会った主体は「私」。
V “met” / 主節 V / met は過去形。「会った」。
O “Dr. Ito” / 主節 O / 先行詞は Dr. Ito。who 節は伊藤先生への補足情報であり、対象を選び分けない。

(At 〈the science fair〉), I met 〈Dr. Ito〉, 〔who studies 〈plants 〔in 〈dry regions〉〕〉〕.
S　V　O

S “who” / 関係節 S / who は Dr. Ito を受け、studies の主語になる。
V “studies” / 関係節 V / studies は現在形。「研究している」。
O “plants in dry regions” / 関係節 O / 乾燥地域の植物。in dry regions は plants への修飾を採用するが、研究場所を表す別読も可能。

b. 全文和訳

直訳　科学展で、私は伊藤先生に会った。伊藤先生は乾燥地域の植物を研究している。

満点の訳　私は科学展で伊藤先生に会った。先生は乾燥地域の植物について研究している。

どちらの訳でも、主節の「科学展で伊藤先生に会った」という出来事と、関係節の「乾燥地域の植物を研究している」という補足情報を保持している。

主節の met は meet の過去形であり、科学展で会ったという過去の出来事を表す。一方、関係節の studies は現在形であり、伊藤先生が研究しているという現在の活動を表している。

そのため、studies を主節の met に合わせて過去形の意味に変える必要はない。「研究していた」と訳すと、現在も研究しているという原文の表現から離れてしまう。

また、in dry regions については、今回は plants を説明するものとして「乾燥地域の植物」と訳している。ただし、「乾燥地域で植物を研究している」という別の読み方も成立するため、その解釈に基づく自然な和訳を誤りとすることはできない。

今回の訳では、Dr. Ito を「伊藤先生」と表している。Dr.には博士号を持つ人や医師などに用いられる場合があるが、英文だけでは具体的な職業を確定できない。

さらに、「伊藤先生が乾燥地域の植物を研究していたので、科学展で会った」と訳すと、原文にない理由の関係を付け加えてしまう。

日本語では、補足的な関係節を二文に分けることで、主節の出来事と人物についての情報を明確に示せる。**文を区切っても、誰についての補足なのかを保ち、時制や情報関係を変えずに訳す**ことが大切だ。

5

a. 先行詞と情報関係

先行詞は The community center（その地域の集会施設）であり、関係節は which has a large kitchen である。これは**補足的用法**に当たる。

which has a large kitchen は「大きな調理室がある」という意味で、The community centerについて情報を付け加えている。

関係節の内部では、which が has の主語に当たり、先行詞 The community center と対応している。関係節は kitchen まで続き、2 つ目のコンマの後にある is open から主節の述語部分へ戻る。

主節の中心は The community center is open であり、その施設が開いていることを表している。until nine on weekdays は、平日の開館時間について述べている。

この英文では、関係節は「大きな調理室がある施設」をほかの施設から選び分けるためではなく、既に取り上げた施設について設備の情報を補っている。

ただし、補足的用法だからといって、その地域に集会施設が一つしか存在しないとは判断できない。また、大きな調理室があることと開館時間の間に、特別な因果関係があるとも述べられていない。

〈The community center〉(S), 〔which has 〈a large kitchen〉〕, is (V) 〔open (until nine)〕(C) (on weekdays)(M).

S “The community center” / 主節 S / 先行詞は The community center。which 節は施設の設備についての補足情報。
V “is” / 主節 V / is は現在形。施設の開館状態を表す。
C “open until nine” / 主節 C / open が施設の状態を表し、until nine がその時間的な終点を示す。午前・午後は未指定。
M “on weekdays” / 曜日 / 平日に。週末の開館状況までは示さない。

〈The community center〉, 〔which has 〈a large kitchen〉〕, is 〔open (until nine)〕 (on weekdays).
S V O
S “which” / 関係節 S / which は The community center を受け、has の主語になる。
V “has” / 関係節 V / has は現在形。施設に設備があることを表す。
O “a large kitchen” / 関係節 O / 施設が備えているのは大きな調理室。

b. 全文和訳

直訳　その地域の集会施設は、大きな調理室を備えており、平日は 9 時まで開いている。

満点の訳　その地域の集会施設には広い調理室があり、平日は 9 時まで開いている。

どちらの訳でも、主節の「平日は 9 時まで開いている」という情報と、関係節の「大きな調理室がある」という補足情報を保持している。

関係節の has は現在形であり、施設に調理室があるという現在の状態を表す。主節の is open も現在形であり、平日の通常の開館時間を述べている。

until nine は「9 時まで」を意味するが、英文には午前か午後かを示す情報がない。そのため、「午前 9 時まで」「午後 9 時まで」と時刻を特定して訳してはいけない。

on weekdays は「平日に」という意味で、開館時間についての条件を示している。毎日 9 時まで開いていると一般化したり、週末は休館すると推測したりすることもできない。

また、「大きな調理室があるので、平日は 9 時まで開いている」と訳すと、原文にない理由の関係を加えてしまう。

「大きな調理室を備えている」と「広い調理室がある」は、この英文では自然な言い換えとして使える。日本語では一文にまとめても二文に分けてもよいが、**施設の設備についての補足情報と、平日の開館時間という主節の情報を、それぞれ正確に伝える**必要がある。

6

a. 先行詞と情報関係

先行詞は a painting（一枚の絵画）であり、関係節は which shows a quiet harbor at sunrise である。これは**補足的用法**に当たる。

which shows a quiet harbor at sunrise は、ここでは「日の出の時の静かな港を描いている」という意味で、a painting について情報を付け加えている。

関係節の内部では、which が shows の主語に当たり、先行詞 a painting と対応している。shows の目的語は a quiet harbor であり、at sunrise は、ここでは絵に描かれた港の場面の時間を表している。

主節の中心は the students admired a painting であり、生徒たちが一枚の絵画を鑑賞して感心したという過去の出来事を表している。At the gallery は、その出来事が起きた場所を示している。

この英文では、a painting を主節の目的語として取り上げ、その後のコンマ付き which 以下で絵の内容を補っている。関係節は文末まで続くため、途中で主節に戻る部分はない。

重要なのは、which が受けているのは a painting という名詞であり、「生徒たちが絵画を鑑賞した」という出来事全体ではないことだ。

at sunrise は、which で始まる文末の補足的な関係節の内部にあり、絵に描かれた港の場面の時間を示している。この関係節は文末まで続くため、at sunrise を主節の admired に戻して鑑賞時刻を表すものとは読まない。生徒たちがいつ絵を鑑賞したのかは、この英文からは特定できない。

(At 〈the gallery〉)[M], 〈the students〉[S] admired[V] 〈a painting〉[O], 〔which shows 〈a quiet harbor 〔at sunrise〕〉〕.

M “At the gallery” / 場所 / 美術館で。
S “the students” / 主節 S / 鑑賞した主体は生徒たち。
V “admired” / 主節 V / admired は過去形。絵を感心して鑑賞したことを表す。
O “a painting” / 主節 O / 先行詞は a painting。which 節はこの絵画の内容を補足し、鑑賞した出来事全体を受けない。

(At 〈the gallery〉), 〈the students〉 admired 〈a painting〉, 〔which[S] shows[V] 〈a quiet harbor 〔at sunrise〕〉[O]〕.

S “which” / 関係節 S / which は a painting を受け、shows の主語になる。
V “shows” / 関係節 V / shows は現在形。絵画が描いている内容を表す。
O “a quiet harbor at sunrise” / 関係節 O / 描かれているのは日の出の時の静かな港。at sunrise は絵の場面を説明し、鑑賞時刻は示さない。

b. 全文和訳

直訳　美術館で、生徒たちは一枚の絵画を感心して眺めた。その絵画には、日の出の時の静かな港が描かれている。

満点の訳　生徒たちは美術館で一枚の絵を感心して鑑賞した。その絵には、日の出を迎えた静かな港の風景が描かれている。

どちらの訳でも、主節の「生徒たちが絵画を鑑賞して感心した」という出来事と、関係節の「絵には日の出の時の静かな港が描かれている」という補足情報を保持している。

主節の admired は過去形であり、鑑賞したという過去の出来事を表す。admire には、対象を眺めるだけでなく、感心したり称賛したりする意味がある。そのため、単に「絵を見た」と訳すだけでは、原文が表す評価の意味が弱まってしまう。

一方、関係節の shows は現在形であり、絵画がどのような場面を描いているかを表している。主節が過去形だからといって、絵の内容まで過去の状態として訳す必要はない。

at sunrise は、今回の訳では a quiet harbor の場面の時間として捉えている。そのため、「日の出の時の静かな港」「日の出を迎えた静かな港」と訳している。

この英文の at sunrise は、which 以下の補足的な関係節の中で、絵に描かれた港が日の出の時の場面であることを表している。関係節は文末まで続いており、at sunrise を主節の鑑賞時刻へ移す読みは採らない。絵の場面が日の出であることと、生徒たちが絵を鑑賞した時刻が述べられていないことは、明確に区別する必要がある。

また、「日の出の港が描かれていたので、生徒たちはその絵に感心した」と訳すと、原文に明示されていない理由の関係を付け加えてしまう。

「感心して眺めた」と「感心して鑑賞した」は、どちらも admired が表す肯定的な評価を明示する自然な訳し方である。一方、「見入った」だけでは、感心や称賛の意味が必ずしも伝わらない。日本語の表現や文の区切り方は一つに固定されないが、**鑑賞した主体、鑑賞に伴う肯定的な評価、絵画の内容、主節と関係節それぞれの時制を保持する**ことが重要だ。